

五月定例能番組

令和二年五月三日(日) 午後一時始
於 石川県立能楽堂

(能)

鬼王 谷 清士
團三郎 酒井 章
トモ 木谷 哲也
母 福岡 聡子
五郎 佐野 弘宜
シテ 藪 克徳

小袖曾我

大鼓 田中 一義
小鼓 住駒 充彦
笛 室石 和夫

後見 渡邊荀之助
佐野 玄宜

休憩 二十分

地謡 寺田 茂 渡邊 茂人
船本 嘉人 高橋 右任
岩井 嘉樹 島村 明宏
松本 博 高橋 憲正

(仕舞)

藤

キリ

松田 若子

地謡 松本 博
佐野 由於
島村 明宏
田屋 邦夫

(狂言)

隠

狸

太郎冠者 炭

哲男

主人 炭 光太郎
後見 中尾 史生

(能)

須磨源氏

シテ

藪 俊彦
ワキ 苗加登久治
ワキツレ 平木 豊男
ワキツレ 渡貫 多聞

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 河原 清
太鼓 麦谷清一郎
笛 高島 敏彦

間能村 祐丞

後見 佐野 由於
松田 若子

地謡 長野 裕 高橋 憲正
中村 清 広島 克栄
山崎 健 渡邊 茂人
田屋 邦夫 佐野 玄宜

終了 午後四時十五分頃

能 小袖曾我 (こそでそが)

建久四年五月半ばのこと、曾我の十郎祐成(シテ)・時致(ツレ)兄弟と従者(立衆)が出て、頼朝の富士の御狩に参加して敵の工藤祐経を狙うつもりだが、その前に母の家を訪れて時致の勘当を許してもらおうと述べます。祐成は母(ツレ)に対面の挨拶をし、時致は物陰からその様子を伺います。祐経に促されて時致が案内を乞うと、母は勘当の身で推参するとはなお重ねての勘当よと、神々に誓約し部屋を閉め切つてとりつく島もありません。母は祐成にも時致をかばうなら共に勘当すると申し渡します。そこで祐成は時致を伴い母の前に出て、出家したところで悔しい思いをして結局は俗に劣り、むしろ時致の孝心は日々の読経念仏に他念なく、さらに狩り場に行くのは何のためかと涙ながらに切々と訴えます。母は声を上げて兄弟を引き留め、時致の勘当を赦します。狩り場の門出に兄弟は祝言を謡い舞い、本望を遂げて親孝行の手本になろうと、勇んで狩り場に向かいます。

狂言 隠 狸 (かくしだぬき)

狸を釣る太郎冠者が、主人には釣らぬと答えて、ならば買ひ求めて来いと市へ行かされます。しかしまずは昨夜釣った狸を売ろうと、市で売り声をあげたところを主人に見つかります。あわてて狸を隠しますが、冠者の酒癖を見透かした主人に振る舞い酒をされ、次第に饒舌になって、狸の釣り方を詳しく語りなどします。肴に舞を主人が所望し、腰の狸を気にしながらの、両者連れ舞いのうちに、主人が隠し狸を奪って冠者を追い込みます。

能 須磨源氏 (すまげんじ)

日向の国宮崎の社官藤原興範の一行(ワキ・ワキツレ)が伊勢参宮の旅の途中、津の国は須磨の浦に着き、花に眺め入る老いた山賤(前シテ)に出会います。その花は光源氏ゆかりの若木の桜でした。山賤は源氏物語の巻名を織り込んで光源氏の閱歴を語り、さらに光源氏の旧跡を問う興範に、月の夜の奇特を待てと言いついて雲隠れました(中入)。やがて磯枕して心を澄ます興範の耳に妙なる音楽が聞こえてきます。これも源氏物語紅葉賀に描かれた、光源氏の舞い姿で名高い青海波の楽です。今は兜率天に住むいにしへの光源氏が、月に詠じ波の楽に惹かれて天下ったのです。青暗い夜の海に雲間から一条の月光がさして、青鈍色の狩衣をまとった童男(後シテ)が現れ、須磨の嵐に袂をひるがえして夜すがら舞い興じます。須磨暮らしの失意や物語第二部の苦悩にはあえて触れずに、栄華を極めた人の生涯をたどり、シテの人間の奥行より兜率天の菩薩の相貌を鮮明にしました。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 令和二年六月七日(日)午後一時始

(能) 金 札

(狂言) 伯母ケ酒

(能) 草紙洗